

等の點よりして皆有名の人なりとはいふべけれども、言語學上より氏の爲せる所を觀察すれば、決して深邃の見識を抱きしものとは謂ふことあたはず。其の「デシマ」に於て編纂せる日本文典要略 *Eyitome Linguae Japonicæ* は千八百二十六年即ち我文政九年にバグビヤの學術會の第十一會の報告中に發行せられたり。而して此の書は決して先輩の著したる書に優るものにあらず、氏は唯本邦人の教師より其國の話し言葉と文章語との教授を受けたるものにして、氏自らは皆何れをも慥かに識らざりしなり。〔此の評言はローニー氏か英國博言學會報告千八百七十七年乃至九年中になしたる所に據る〕

シーボルトが歐洲に齎し行ける日本書籍を彼の國にて編纂するに當り、氏は門下に一人の學者を得たり。此門人は早く出藍の名譽を得、日本語學殊に文章上の言語に關しては、最も堅固なる智識を有するに至れり。是れ即ち博士ジ・ Hoffman、Dr. J. Hoffmann にして、爾來ライデンに於て教授となりし人なり。氏はシーボルトの爲めに價値ある「コラボレートル」となり、大に其の師の編纂事業に對して功あり。此の編纂を組織したる書籍の明細標目は、シーボルトに依りては *Bibliotheca Japonica* と命名せ

られ、ホフマンに依りては *Catalogue Librorum et manuscriptorum Japonicorum*, Leide 1845. と命名せられたり。又ホフマン氏は能く支那學に達せしが故に、

一 佛法經典 *Buddha Pantheon von Nippon.*

一 和漢年契 *Geschichtstafellen von Japan.*

一 養蠶方法 *Part D'élèver les vers à soie au Japon.* Paris, 1848.

一 和漢音譯辭書言字考 *Thesaurus Linguae Japonicæ Leide*, 1835.

等を出版せり。就中此の書言字考は、石刷にて出版せられ、今日まで大に學者界の珍重する所のものなり。然れどもホフマン氏の日本語學に對して有名なるは、決して以上の點に存するにあらずして、全く氏が *A Japanese Grammar or Japanische Sprachlaer* 日本文典(明治元年)の上に於て然るものとす。氏と同時に其の書を英語と蘭語にて出版せり。こは初め出嶋の和蘭商館にてドンケルクルシヤス氏 *Donker Curtius* が編纂せし普通文典を補綴せしもの、即ち *Proeve eener Japanische Sprachkunst*, Leide 1857. より發達し來れるものにして、實に博言學上の進歩と博覽とに至りては未曾有と稱せざるべからざるなり。今我帝國大學に所藏せる英文の普氏文典の序を見るに、氏は左の如

く書して云ふ

一此書は余の率先的著述にして、決して他に模倣せるものにあらず。是れ實に予が數年間日本文學上に爲せし研究の結果にして、日本の文章上の言語をば、其の古代及び近代の體形にて、記述するものなり。

一此の書には、又口語上に於て予が自己の觀察せる所をも載す。予が佛蘭西、英、吉、利、殊に和蘭に來り居る日本人に親炙し、交際せることは、實に予に好機會を與へたり。或は文明の大氣を吸へる、或は學理の深妙に達せる、而して時に劣等無學なる日本人に接するを得るに至りては、其好機會は殊に予に價值あるものなりき。されば予は身日本の土地を踐まずと雖も、口頭言語を觀察の區域中に包攏し、之を文章言語と連接して論ずるに當りては、正當の權理を有する者と信す。

一予は自ら信す、予の日本の著書より引證せる所は、其の字形の如何を問はず、盡く正實なりと。予は自ら之に頼り、且つ他人の經驗も、苟も其の偏執的ならざる以上は、當にその如しと云ふべきを信す。

一予は日本語を領得せる方法、及び分析總合二法を以て、其の顯象を取扱へる方法

に關しては、其の言語の氣性と、同じく、簡單に且つ自然的に之を爲せり。予の日本の經驗は、益々此の事を確め、實に其の實際的なることを知る。

一予が今此の文法に適用する方法は、已に其の大略をば十年前、予がクルシヤス氏の書を出版せしときに示し、當時大に學者の喝采を博したり。かの英國の 에스、アール、ブラオンが S. R. Brown が千八百六十三年に *Colloquial Japanese or Conversational sentences and dialogues in English and Japanese* 日本俗語或は英和會話篇を出版するに當りても、多分は予の方法に頼りたるを知る。

一今出版する文典を完全ならしめんには、文章法 *Syntax* の一篇なからざるべからず。予は既に材料をば蒐集したれば、一冊の書として他日之を出版すべし。此の二書に由り、學生は和蘭英對譯辭書を利用するを得べし。これにも予は十分の材料を有するが故に、之を出版する時は、早く日本文學に到達する重要な方法を諸人に示すを得べきを信す。

これによりて觀れば、氏は日本文學に關して、經歷せる所、且つ未來に企圖せる所の一斑をも知るを得べし。而して余輩は、たゞ氏の文典あるを知るのみ、其の文章法及び

辭書の如きに至りては、未だ之を詳にせず。氏之を著して余輩未だ之を知らざるか、氏之を著はさゞりしが爲に、余輩遂に之を知る能はざるか。そは如何にまれ、今より二三十年前にありて、しかも數千里外の和蘭國にありて、他の書籍は暫く論せず、日本文典の如き緻密なる研究を遂げらしは、尤も驚嘆すべきの至りならずや。かの日本語を分類して

名詞 代名詞 形容詞 數詞
副詞 後置詞 動詞 接續詞

となし、之に付きて明細の議論を興ふることを爲せしも、實に其の初はホフマン氏に於て見ると云ふべし。勿論些細の點に至りては、今日の進歩せる科學界より見れば、非難すべき所多しと雖も、然れども其の大綱にいたりては、動く所決して多からずと信ず。彼の各國の語學者の、殊に英國學者の日本語學に對する智識は、皆氏に遡源せりと云ふも、誣言にはあらざるべし。余は故にホフマン氏を稱して、歐米人中日本語學者の父なりと謂はんと欲す。

ホフマン氏の或る門人は、又日本語學の進歩上に興りて力あり。殊にセントオーレー

An Elementary Grammar of the Japanese Language
with easy progressive Exercises. By Tatsui Baba.
London: Tribner and Co., 57 and 59 Ludgate Hill.
7879.
此の如く The Lad Houghton = Dedicat...

ル氏及グルネウエルト氏 Saint Aulaire, Groeneveldt は快走體書法即ち草書初歩を著したり。即ち A Manuel of Chinese Running-hand Writing, especially as it is used in Japan. Amsterdam 1861. にして千八百六十一年に「アムステルダム」にて出版せられしものこれなり。

我明治元年即ち一千八百六十八年以後和蘭の日本語に對して爲せる所は甚だ少し。蓋し昔にありては和蘭人は日本に渡航し得べき唯一の國民なりしが徳川幕府の末年より歐洲の各大國は皆進んで東洋交通の策を取り従ひて各其の目的を達せしかば蘭人の東洋殊に我日本に於ける勢力は頓に減じて佛蘭西英吉利等其の後を續ぐに至れり。而して其の特に言語學上の實力を世界に誇るに足るべき度に進めし者は全く英吉利人なりとす。見るべしかのアストン氏は Hoffman 氏の跡を繼ぎ、我がチャンバレン氏はアストン氏の後を繼ぎたることを。

○日本語中の人代名詞に就きて

茲に述べますのは私が嘗て調べましたさうして今でもまだ注意して居ります、日本語の人代名詞と申す論題の中より其の幾分を抜き書きましたものであります。勿論

日本語中の人代名詞に就きて

(明治二十三年二月稿)
全詞三月五日發行
本洋書局發行
三橋 敬

本篇には種々の書物より採りし例や、或は時代に從ひ、又語原に從ひ、類別致した表があります。それに又、この代名詞に就きて、國學者先生の論と、西洋の文法家ホフマンとで、殊に専門學に渡りて居りますから、皆様には、おもしろくなからうと存じ、態と茲には略しました。唯私は人代名詞の種類とこれについての五六の意見とを述べようと思ひます。

第一人稱

あ(吾)

あれ(吾)

ぼく(僕)

じぶん(自分)

こち こつち(此方)

このもと(此許)

このはう(此方)

せうせい(小生)

それがし(某)

てまへ てまい(手前)

まろ

み(身)

みづから(自)

みども

おの

おのれ

おいら

おれ(己、乃公)

やつがれ(拙者)

其他文章の上では多く漢語を使ひ、

愚

愚拙

愚生

不肖

小子

拙者拙

わがはい(吾輩)

わなみ(吾儕)

わらは(妾)

わ われ(我) われく

わろ

わたくし(私) わつち わちき

わたし わたい わし

よ(予)

よはい(予輩)

など、まだ餘程あります。天子に朕といき、人民に臣と書くのは古くよりの例であり

ます。

第二人称

| | |
|--------------|----------|
| あなた(貴方) | こち(此方) |
| ごへん(御邊) | こなさま(此様) |
| ごじぶん(御自分) | こなさん(此様) |
| ごじぶんさま(御自分様) | |
| いまし(汝) | こなた(此方) |
| かなた(彼方) | このほう(此方) |
| きでん(貴殿) | こなた(此方) |
| きこう(貴公) | まうと |
| まくん(貴君) | みまし(汝) |
| きみ(君) | な(汝) |
| さんじ | なんじ(汝) |
| きさま(貴様) | なれ(汝) |

| | |
|------------------|-----------|
| ぬし(主) | そつち(其方) |
| おこと(御事、和女) | そさま(其様) |
| おまへ(御前)おんまへ(御前) | わども(汝等) |
| おまへさま(御前様) | わがみ(汝身) |
| おんみ(御身) | わごりよ(我御料) |
| おもと(和女) | わぬし(吾主) |
| おの(汝) | われ(汝) |
| おのれ(汝) | わせんじやう |
| おぬし(御主)おてまへ(御手前) | うぬ(汝) |
| し(子) | うし(天人) |
| そち(其方) | |
| そつか(足下) | |
| そこ(其處) | |
| そなた(其方) | |

日本語中の人代名詞に就きて

そのほう(其方)
そのもと(其許)
そもじ(其文字)

其外漢語の尊君、大人、雅君、先生等澤山の語があります。また天子及び皇后には、陛下と云ひ、皇族に殿下と云ひ、大臣及び高貴の人に閣下と云ひ、紳士などには貴下と云ひます。

第三人稱

あなた(彼方)

おの(己)

あれ(彼)

しやつ(其奴)

かなた(彼方)

そいつ(其奴)

かれ(彼)

それ(其)

きやつ(彼奴)

おんまへ(御前) おまへ(御前)

日本語で三人稱は主に指示代名詞の、あの、かの、その、を使つて別ちます。かれ(彼)、かの

をんな(彼女)、それ(其等)の代名詞は、殊に洋學が開けてよりはやりだしたのであります。

私は主要なる人代名詞をば前に挙げました。まだ残りて居るのは澤山ありませう。然しそれはそれにして、之より右の代名詞の上に就きて、少し私の思ふ所を述べませう。

一、人代名詞は日本語の名詞の如く、ら(等)、たち(達)、或は(ち)ども(共)、が(た)方、ともがら(輩)、しゅう(衆)、或は(しゆ)などつけて、複數を示します。然かし右の語尾は、また不定を示すことが屢々あります。茲に一つ注意すべきは、右の語尾は、どの代名詞にでも附くのではなく、其々慣習に従ふといふことです。

二、英吉利で反射代名詞といふのは、日本では、われ(我)、じぶん(自分)、おのれ(己)、みつから(自)の四つで用を足します。是等は、もと一人稱の代名詞ですが、皆三つの人稱に通じて用ゐます。

三、或代名詞は、一人稱より二人稱を拵らへます。例へば自分より、御自分、手前より、御手前、われ(我)より、われ(汝)、おのれ(己)より、おのれ(汝)の如きものです。中にも

おもしろいのは、手前といふ詞です。人が手前々々といひて話す所から、其の對手は御の尊敬詞を附けて、御手前とたつとんでいひます。所がその向ふの人が無禮でもするか、或は賤しむべき奴ですと、此方ではおを附けぬつもりで、單に手前とて悪しき意味につかひます。

四、或る代名詞は、指示代名詞へ方角を示す名詞を示す名詞を附けてつくられます。例へば、

こち(此方)

そち(其方)

このもと(此許)

そのもと(其許)

こなた(此方)

そなた(其方)

かなた(彼方)

そのはう(其方)

このはう(此方)

の類です。之は人を其れとさ、ず曖昧に指して云ふ所から出たのでせう。このはう(此方)、そのはう(其方)などは、主に役人の詞で、かなた(彼方)、あなた(彼方)、こなた(此方)、そなた(其方)などは尊敬の時か又は漠然といふ時かに用ゐる詞です。

五、日本には、又一つ別の種類の代名詞といふべきものがあります。其は官員の使ふ本官といふ語、議員などの用ゐる本員といふ語の如き類であります。かゝる語はアリヤン語には無いと思ひます。

六、今一つおもしろいのは、夫婦の間の代名詞です。之は種々ありませうが、中には随分苦しいのがあります。「おい」など、いふ呼び懸け言葉が、現に立派な妻君の代名詞です。夫婦の間に子が出来ると尙おもしろい。今迄「おい」あなた(貴方)や(宿)なんかで居た人々が、御父さん御母さんと云はれて、始終通るやうになります。迷惑なのは夫婦の御両親で、それから息子からも嫁からも、御爺祖父さん、御婆祖母さん。是は中等社會の中の部分までに多くはやるのです。

七、「アリヤン」語の人代名詞と、日本語の人代名詞とを比較して見ると、二つのおもしろき事がある。「アリヤン」語では、人代名詞は非常に重要な位置に置かれて居るが、日本語では、決してさうで無い。日本語では、代名詞を使はぬことが甚だ多く、注意を喚び起すときと、曖昧を防ぐ時とだけに之を用ゐ、其外は文面又は他の語の上より、意味を推察させるのであります。今一つは「アリヤン」語で代名詞を

使ふところへ、日本語では屢々本名詞を使ふことであります。然れば、人代名詞と名詞とが、まだ充分に官能官能の分殊をして居ないのであります。

八、能く氣を留めて、以上の代名詞を見ますと、*あ*は *は*の略か、か *は*は *は*のおの *(お)*などの外は、人代名詞といふものは、大抵名詞より變じたものか、或は指示代名詞を頂く名詞です。之を短くいへば、あかなおのを除いて、總べて他の人代名詞は、人稱を顯はすために、その本の意より離れて、尊敬してか、又は卑下してか、用ゐられてゐる名詞なりと申しませう。

九、私。一人稱を現はすには、此語ほど最も普通に用ゐられて居るのはありますまい。それと同時に、此語ほど種々に變化したのもありますまい。さりながら、多くの文法家の中で、この語の意義を説き明かした人の少ないのは奇妙です。私のおぼえてゐるのは、谷川士清の和訓栞と、ホフマンの日本文法とで、之には其の語原論が擧げてあります。しかし、諸共にこじつけで、其の附會の仕方も最も下手であります。私は思ひますに、之は、わとつくしとの聯合したものであらうと存じます。母音の引合ふことは、アルタイック言語族の常ですから、「つ」が「た」に

なることは、さほど疑ふには及びますまい。しかし、之は私の憶説です、皆さんは如何におぼしめますか。

國語のため第二終

110

明治三十六年六月十日印刷
同 年六月十三日發行

國語のため第二
定價金六拾錢

著者 上田 萬年

發行者 東京市神田區裏神保町九番地
會社 富山房

代表者 同所合資會社富山房社長
坂本 嘉治 馬

印刷者 東京市京橋區築地三丁目十五番地
野村 宗十 郎

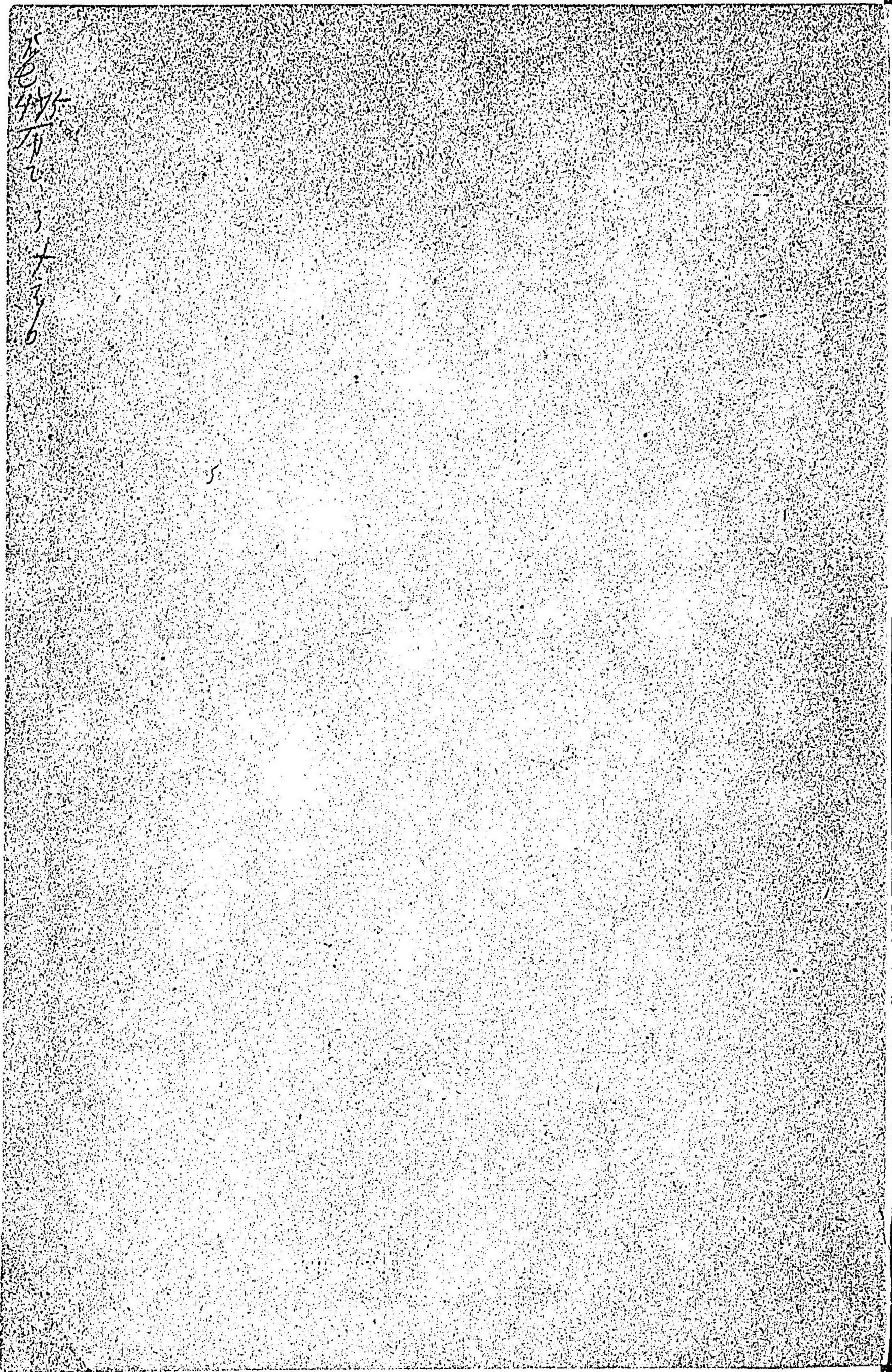
印刷所 東京市京橋區築地二丁目十七番地
株式會社 東京築地活版製造所

發兌元

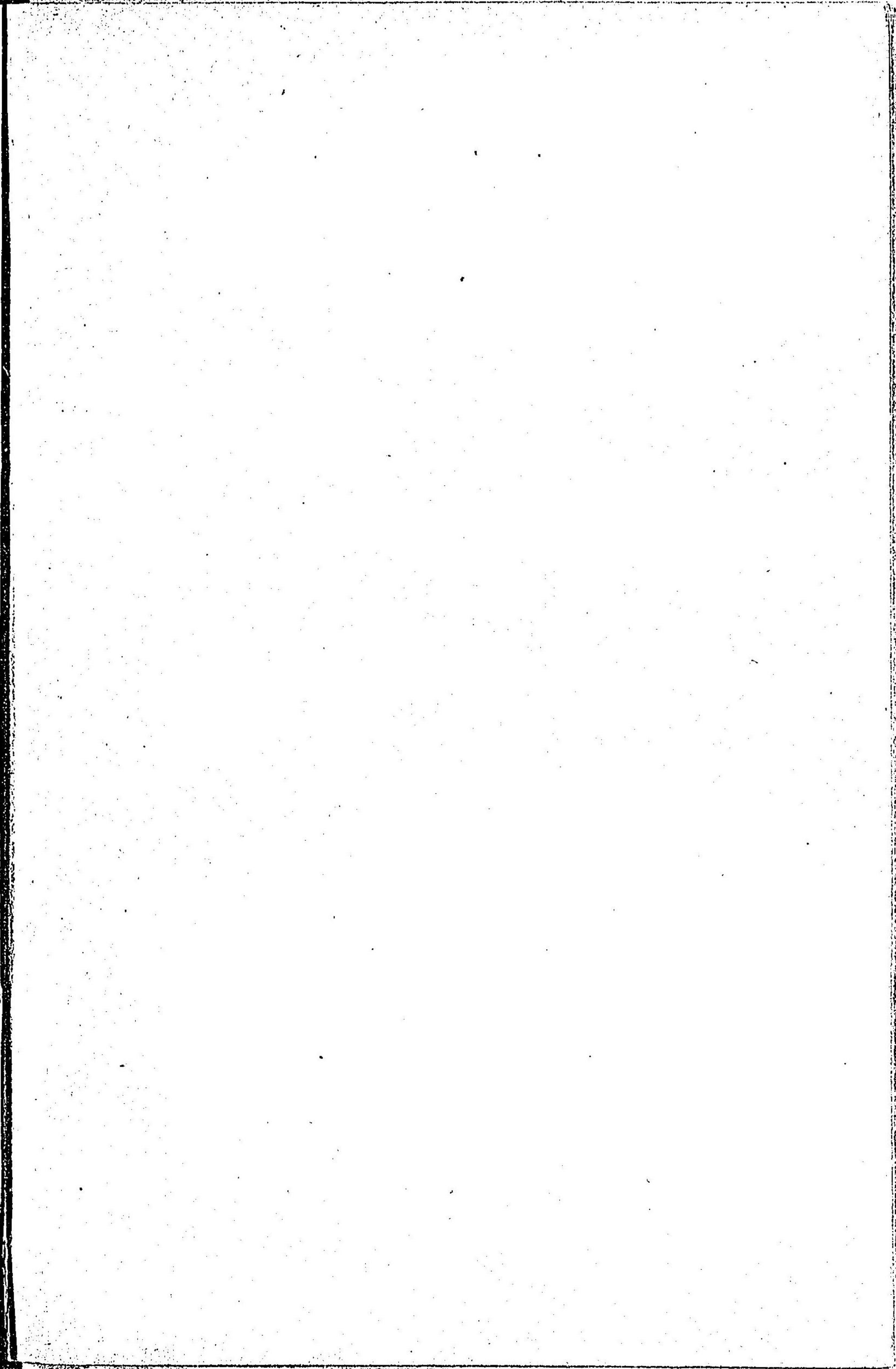
(明治廿九年六月設立)

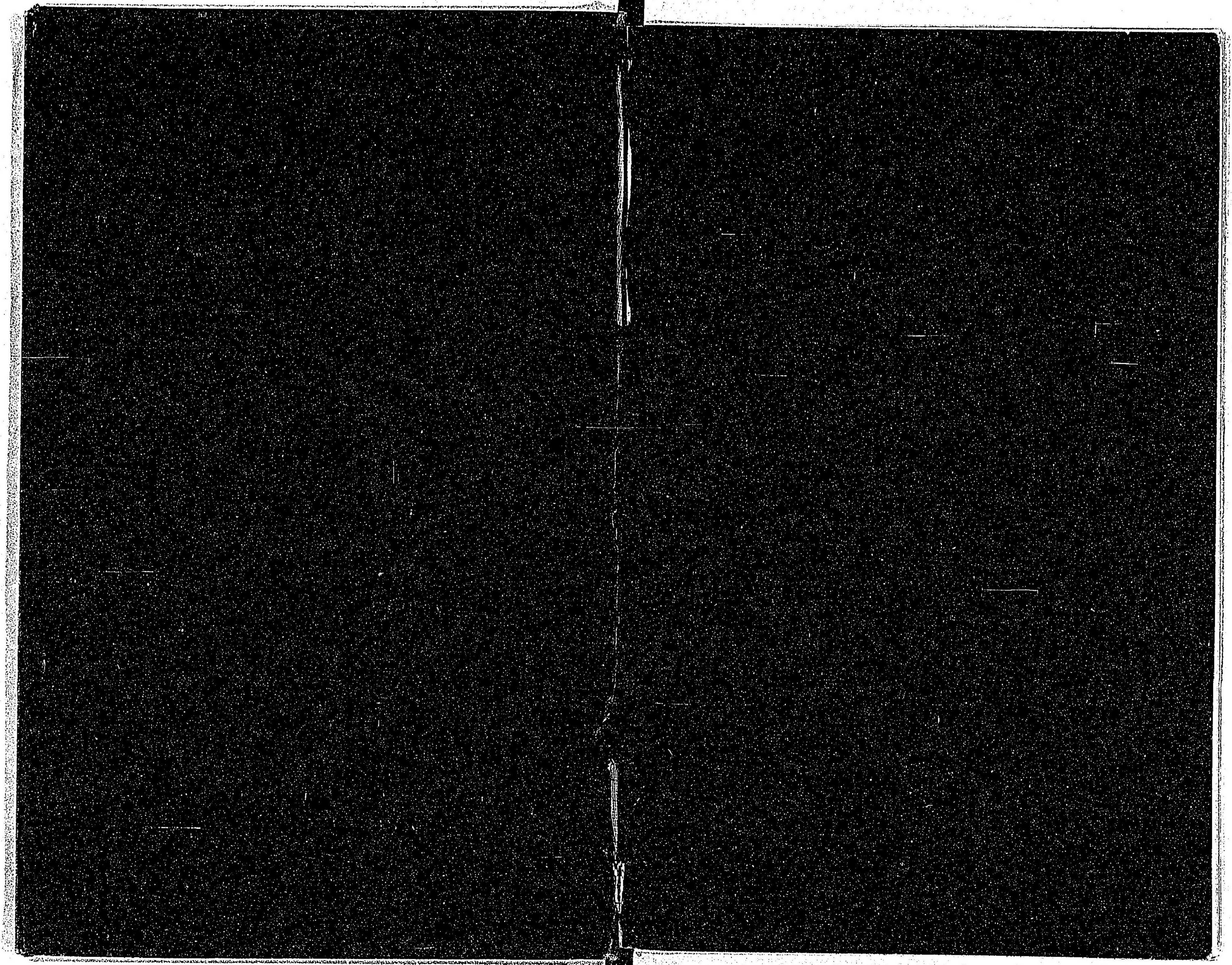
會社 富山房

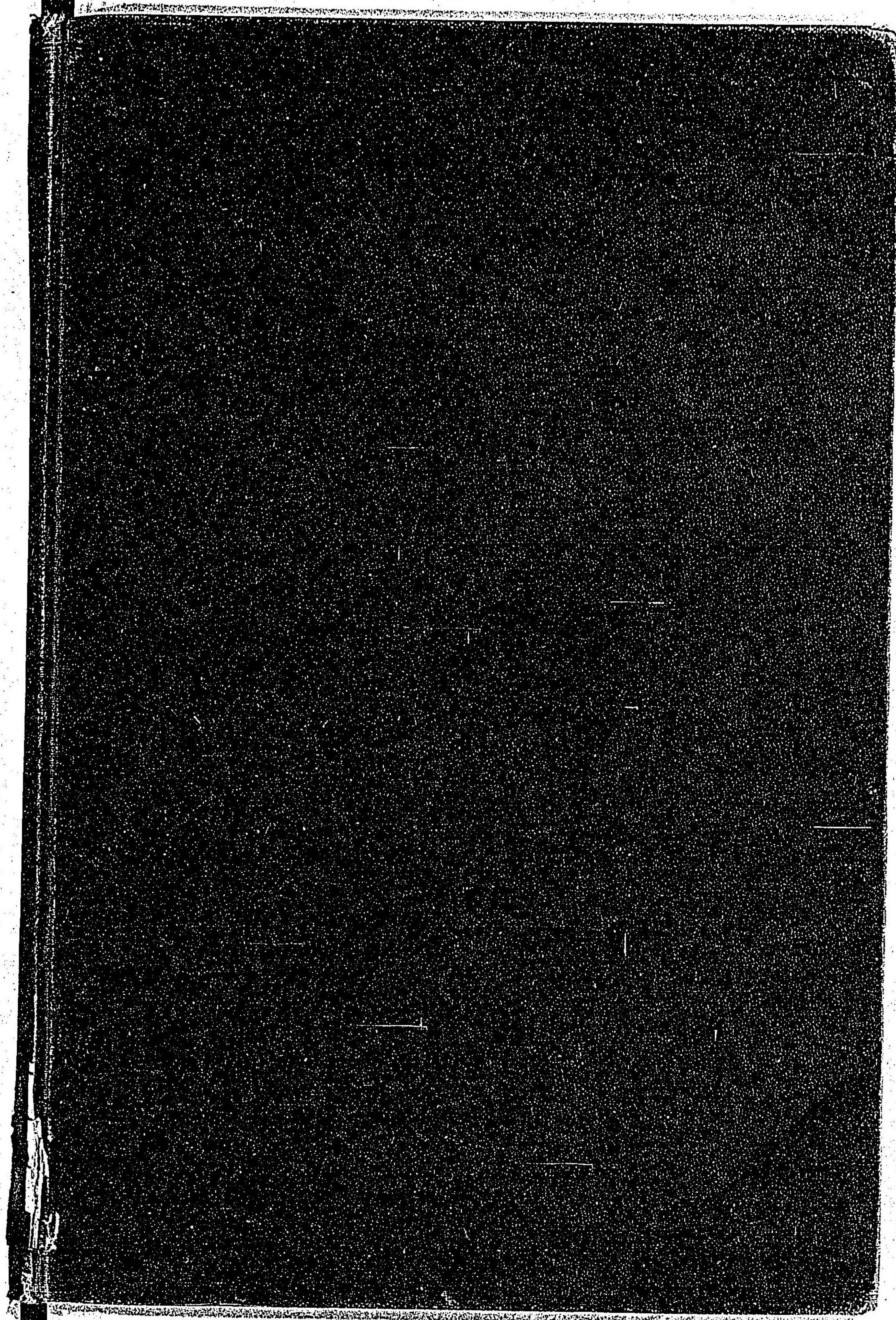
(電話本局 一〇三六)



445
74
3
+
3
6







810.4
U175k

M

076900-000-1

810.4-U175k

国語のため(第二)

上田 万年/著

M36.6

DAC-0063

